

17. 原発性肺癌における Ga シンチの有用性

—多変量解析を用いて—

角 美奈子 高木 善和(熊本通信病院・放)
 絹脇 悦生 (熊本中央病院・呼吸器)
 古嶋 昭博 廣田 嘉久 高橋 睦正
 (熊本大・放)

原発性肺癌の治療前画像診断として施行頻度の高い Ga シンチに関し、その有用性について多変量解析(数量化 II 類)を用いて検討を加えたので報告した。

症例は、熊本中央病院にて原発性肺癌と診断された 312 例(内手術例 132 例)であり、Ga シンチ陽性率は 83.3% であった。Ga 集積に関しては、原発巣の最大径や組織型、stage 等が寄与していた。

治癒切除の可否の決定に対しては、転移の有無、年齢、組織型、CT 上の T, N 因子の関与が大きく、Ga 集積の有無はこれらに比し治療方針決定への寄与は低かった。

18. 小児の ^{67}Ga シンチグラフィにおける胸腺描出の検討

田之上供明 島岡 俊治 竹下 強志
 岩下 慎二 中別府良昭 中條 政敬
 篠原 慎治 (鹿児島大・放)

昭和 58 年から 63 年までの 6 年間に施行された 0 歳から 15 歳までの ^{67}Ga シンチグラフィ(133 症例, 252 スキャン)の胸腺描出について、胸腺描出率、年齢分布、疾患との関係、胸腺描出例での治療との関係について検討した。胸腺描出率は症例数で 15.8%、スキャン数で 13.5% であり、胸腺が描出されるのは 0 歳から 4 歳に多く、全陽性スキャンの 79% を占めた。疾患別陽性スキャンは neuroblastoma (3/6) と malignant teratoma (3/6) に多かったが、さらに多くの症例で検討する必要がある。胸腺陽性例の治療との関係では、化学療法中に陽性率 30% (7/23) と低下し、化学療法後 3 か月以内で 80% (8/10) と化学療法後陽性化する傾向がみられた。

19. ^{201}Tl , ^{67}Ga シンチにて異常集積を認めた癌腫による原発性副甲状腺機能亢進症の一例

岩下 慎二 中條 政敬 中別府良昭
 田之上供明 島岡 俊治 篠原 慎治
 (鹿児島大・放)
 中村浩一郎 納 光弘 (同・三内)

今回われわれは、 ^{201}Tl , ^{67}Ga シンチにて異常集積を認めた副甲状腺腫瘍による原発性副甲状腺機能亢進症の一例を経験したので報告した。症例は 62 歳女性で、肋骨骨折および全身骨痛を主訴として受診した。入院時、頸部甲状腺下極に可動性良好でゴム様硬の腫瘍を触知し、頭部、前胸部、腰部を中心に著明な骨痛を認めた。labo. data では、血清 Ca および PTH-C の上昇、血清 P の低下が指摘され、CT 上甲状腺左葉下極に mass が認められた。 ^{201}Tl , ^{67}Ga シンチでは同部位に一致して異常集積を認め、シンチ上副甲状腺癌腫を疑った。手術の結果、副甲状腺腫瘍は癌腫であり術後生化学ホルモンの所見は正常化した。骨病変は転移によるものであった。

20. 不明熱患者のガリウムシンチグラフィ

中村のみ子 長町 茂樹 星 博昭
 陣之内正史 吉村 広 大西 隆
 二見 繁美 渡辺 克司 (宮崎医大・放)

不明熱の原因病巣部位の検索目的にガリウムシンチが用いられる場合がある。今回、昭和 58 年 1 月から昭和 63 年 7 月までに臨床的に不明熱で入院した 49 例を対象に、ガリウムシンチグラフィの有用性について retrospective に検討した。

49 例中 25 例に異常集積がみられ、このうち原因病巣同定に寄与したものは 4 例で、内訳は悪性リンパ腫 1 例、肺癌 1 例、硬膜下膿瘍 1 例、解離性大動脈瘤 1 例であった。また補助的診断に役立ったものは 4 例で、間質性肺炎 1 例、結節性動脈周囲炎 1 例、癌性腹膜炎 1 例、間質性腎炎 1 例であった。他の 17 例は原因病巣部以外に集積を認めた。

不明熱患者の原因検索に際しガリウムシンチの占める位置について考察した。